キャンパス内緑地と隣接緑地空間のつながり形成に向けて

東北工業大学　正員○菊地　清文・同　松山　正將・同　佐伯　吉勝
㈱秋元技術コンサルタンツ　正員　阿部　和正

はじめに　近年、大気中の二酸化炭素濃度の上昇にともなう地球温暖化が懸念されており、森林の炭素固定機能が注目されている。かって住民の燃料供給を担っていた里山などの炭素固定の役割も変わるものではない。同様に市街地に残存している緑地空間の炭素固定など公益的機能と共に、これら点在する緑地空間のつながりを確保して生物の多様性を育む環境を積極的に整えて行く事も必要に思われる。

著者らは、東北工業大学長町キャンパス造成時の残存緑地を仙台市指定の保存緑地として登録後、保存緑地の諸調査と分析を通して得られた資料に基づいて整備活用に取り組み中である事は昨年度報告している。今回は生物多様性を育む環境づくりのために、これら緑地空間のつながり形成の可能性について報告する。

長町キャンパス隣接地域でニホンカモシカの確認

長町キャンパスの位置する大年寺山一帯は、歴史的にも自然環境的にも豊かな地域資源が数多く残されている地域でもある。このことは点在する保存緑地が小さな沢や水路で結びつき、木流堀を介して広瀬川と名取川・笊川ともつながり、工夫次第ではそれぞれの流域で生活する住民へ有用な生物多様性空間を提供できる事を示唆している。本学が昨年度から開講し２年目を迎えている体験公開講座「緑の楽校」においてもコミュニティの存続と自然との共生に、緑地空間のつながりとなる「緑の回廊」形成の重要性については理解を深めているところである。地域住民聴講生の情報として、ニホンカモシカについては２～３年前に大年寺山で遭遇していることを聞いてはいたが証拠となる画像は確認できなかった。

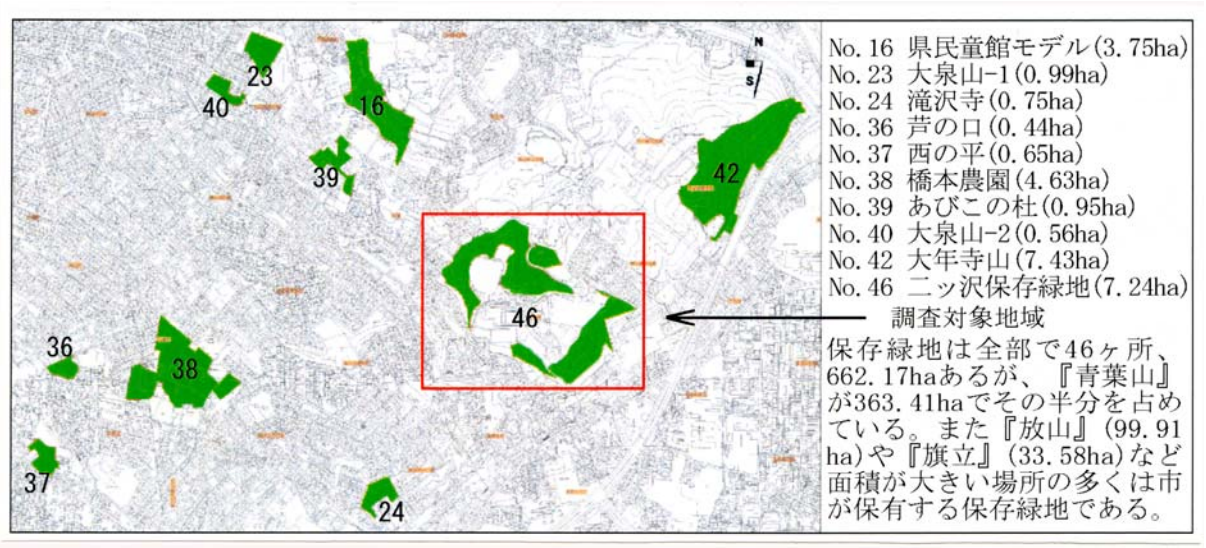
今回幸いにも１２月上旬キャンパス境界確定測量作業中の業者が、ニホンカモシカに遭遇したおりに画像記録したものを研究室に情報提供いただいた。写真－１がその画像である。

写真１：仙台放送鉄塔東斜面地滑防護柵付近(2010/12/04 撮影)

写真－２：東北大学植物園内深沢(2006/11/16 撮影)

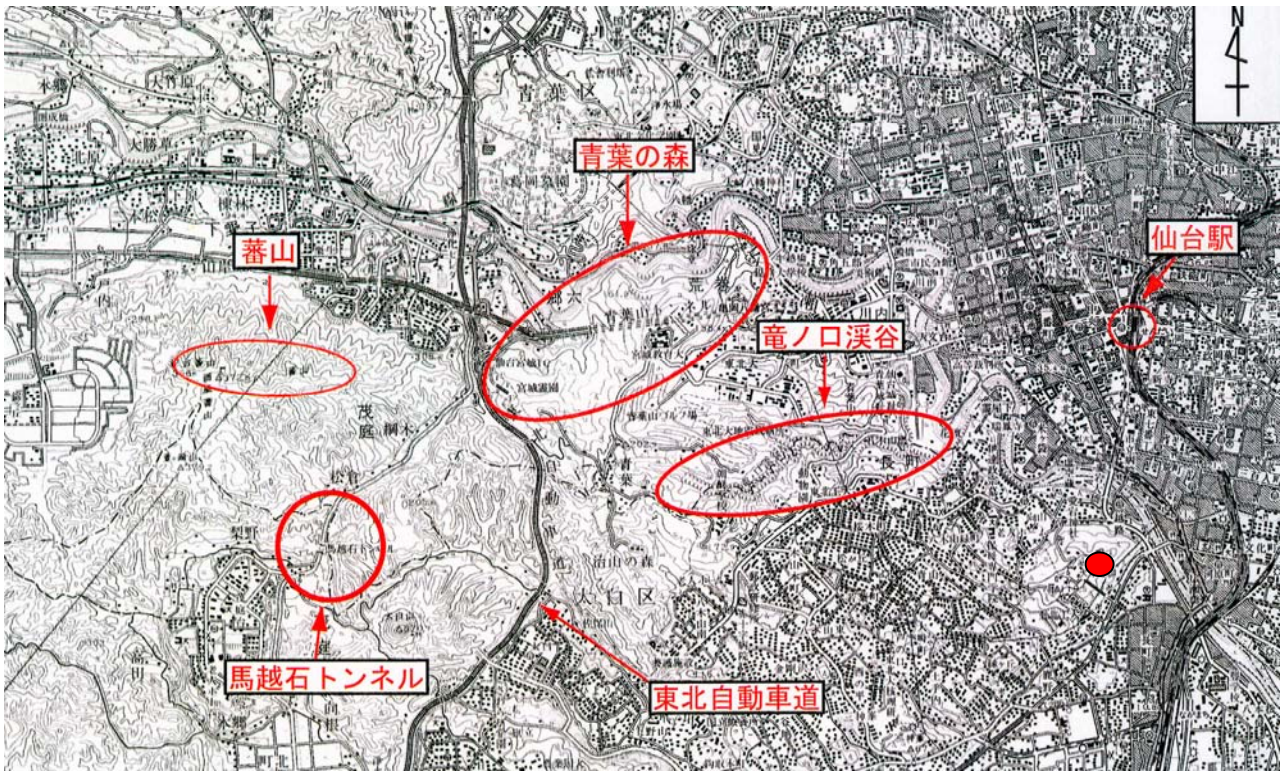
写真－２は、研究室が調査している国史跡「仙台城跡」の御裏林地域（国の特別天然記念物「青葉山」：東北大学植物園）の深沢湧水量測定時に遭遇したニホンカモシカの母子で母シカの画像である。ニホンカモシカの画像については、特別環境保全地域でもある竜の口渓谷流域の左岸側仙台城跡地域や右岸側東北放送構内敷地等でたびたび撮影され新聞紙上に掲載されているのは周知の通りであるが、奥羽脊梁山脈へ連なる丘陵部尾根線の最東端となる大年寺山での撮影確認は珍しいものと思われる。

東北地方で拡大しつつあるナラ枯れ被害や今夏の猛暑などによる野生動物の餌への影響等例年とは異なる環境条件を反映したものとも考えられるが、何より増して仙台市街地に最も近接するこの地域に、まだ大型野生動物が行き交うことが可能な緑地空間が点在していることの証左でもある。本学二ッ沢保存緑地の調査・維持管理手法を導入し観測を継続している、隣接緑地空間との関係位置を示したものが図－１である。



図－１：長町キャンパス内「二ッ沢保存緑地」と周辺の保存緑地（№37,23,39 は調査済）

図－２は、「けものみち」確保で奥羽脊梁山脈へ連なる丘陵部尾根線のなかで最も重要な「馬越石トンネル」位置を示したものである。参考文献(1)では、トンネル上部の動物種の撮影期間 49 日間で、イノシシ、ニホンカモシカ、ニホンリス、ニホンツキノワグマ、ホンドキツネ、ホンドタヌキ、ホンドテン、ホンドイタチの７科９種類の利用が確認されている。加えて、太白山県自然環境保全地域および蕃山・斎勝沼緑地環境保全地域にはアナグマとハクビシンが生息していることも述べている。当然これらの動物も利用していることが推察され、空間のつながり維持と共により豊かな緑の形成を整えて面的拡張への必要性が示唆される箇所でもある。



図－２：「馬越石トンネル」位置（緑の連なりを分断する東北縦貫道には動物用ボックスカルバート等設置　●大年寺山）

おわりに　身近な緑地空間に「緑の楽校」体験講座のような活動を展開できれば、市街地に点在する緑地空間のネットワーク形成(緑の回廊)と共に生物の多様性を維持できる環境を整えて行く事も可能と思われる。

＊　**参考文献及び引用文献**　（１）太白山県自然環境保全地域指定変更学術調査委員会編、「太白山県自然環境地域指定変更学術調査報告書」、宮城県環境生活部自然保護課、2005(平成 17)年３月、87p 付図２葉

＊　ニホンカモシカ：1955(昭和 30)年文化財保護法により特別天然記念物に指定される